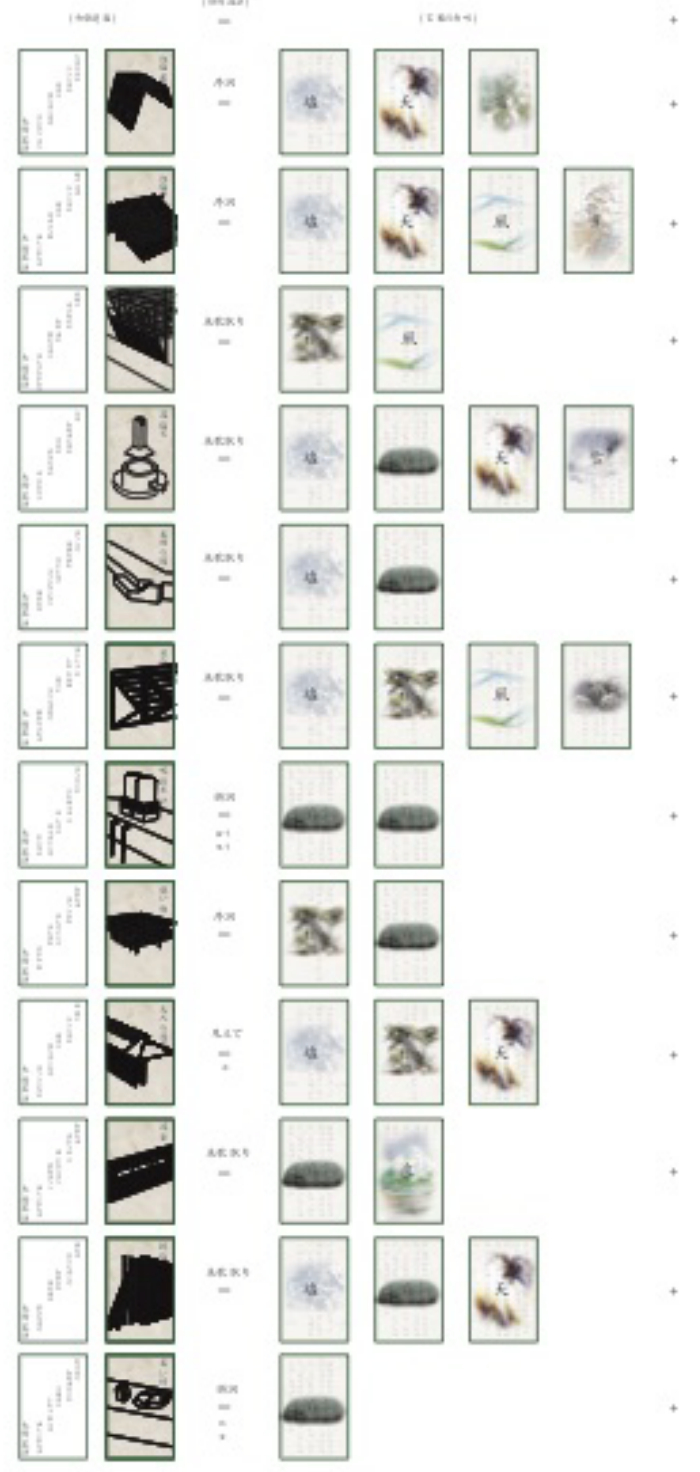
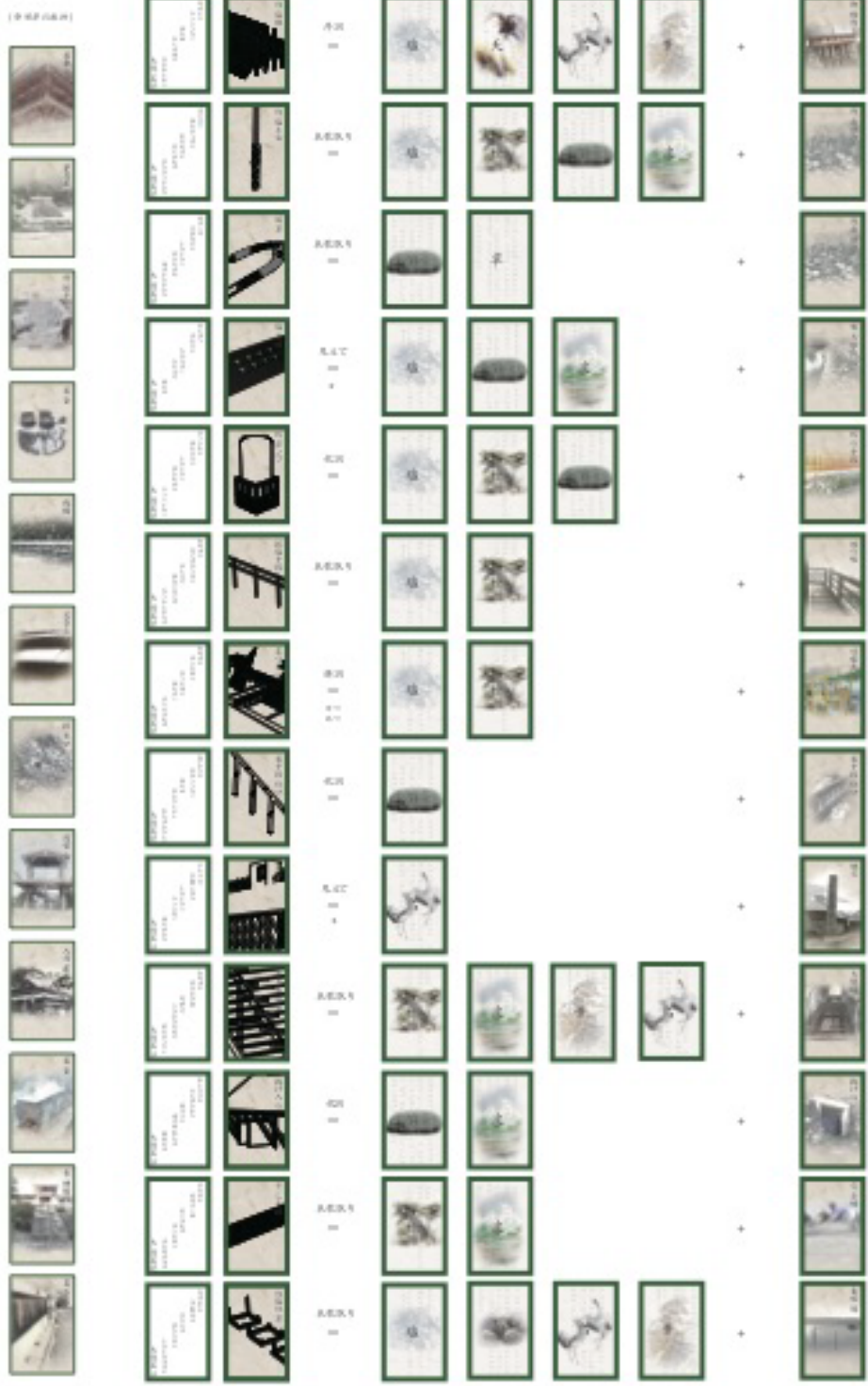


幻塩風景・言葉のある風景の研究と実験建築

令和の時代になり和歌が注目された。私の出身地の日本書紀遺産「和歌浦」はかつて歌人達が無数の和歌を歌ったことから、この土地名が付き、和歌山県が生まれたといわれている「和歌の聖地」である。その中でも万葉の原風景を色濃く残す歌がある。「一に権現、二に玉津島、三に下り松、四に塩屋」という時代性を表す歌がある。これは紀州徳川時代に万葉の原風景を時代に戻った。権現(東照宮)に対しての塩や干物などを奉納したルートである。しかしながらこの奉納のルートは和歌浦の同発や埋立地によって奉納のルートが変更され、塩の文化が衰退し、原風景は失われたとされている。そこで私は新しい奉納のルートの延長線上「一に権現、二に玉津島、三に下り松、四に塩屋」という万葉の原風景に導いた塩かきい未来の復活を計画すると共に、新しい製塩所のプロトタイプとなる実験、研究を行い、この生命の母や神と言われた塩が万葉の風景の一部である観光、産業、生態系をも巻き込み、塩は古代の風景と未来の和歌浦の風景をつなぐ架け橋となる。

この土地の塩産神は塩と神と花っている。全ての時代にとって塩は神であることは変わらない和歌浦であるが、時代によって塩の役割は変わってきていることがわかる。塩といものはかつて、全ての生き物の源といわれ生命の母であったといわれおり、全ての生き物の生態系維持に携わってきた。万葉の時代になると和歌浦の多くの和歌は塩歌といわれ、実際の和歌浦に訪れず、風景を想像して和歌を歌ったといわれている。まさに塩を取り扱った幻想風景を作っていたのである。その後の近世から現代まで塩を人間独自の物に占有し、ただ塩を製作していた生活風景が壊かれている。時代ごとに役割が切れつつあるのが和歌浦の塩文化である。これらのことを踏まえて和歌浦の未来型の塩のあり方は近世の人間独自の塩の製作に加え、幻の風景を具現化し、塩本来の役割、生命の母となることではないか、万葉的な幻想風景から幻塩風景を構築していく。そこで、和歌浦の和歌の用語の意味から、それぞれの言葉の意味を抽出し、そこで得た言葉から幻想風景の痕跡をサグシした。そこで人二五首というカルタを作った。和歌の作り方を建築の設計手法に加えることで、言葉のある風景と言われた和歌浦に万葉歌人達の思想が建築として残ると同時に、近代化によって埋もれた景観遺産を未来へと繋ぐことができる。このカルタから新たな塩作りを提案する。幻の塩と定義づけて、塩の実験を行なった。塩が天へ登る風景を具現化するための実験である。この実験を行うことで、持続可能な新建材を作ると同時に、近代化によるブラックボックス化された塩作りを外へ解放し、観光産業地としての塩作りの新たなあり方を定義した。

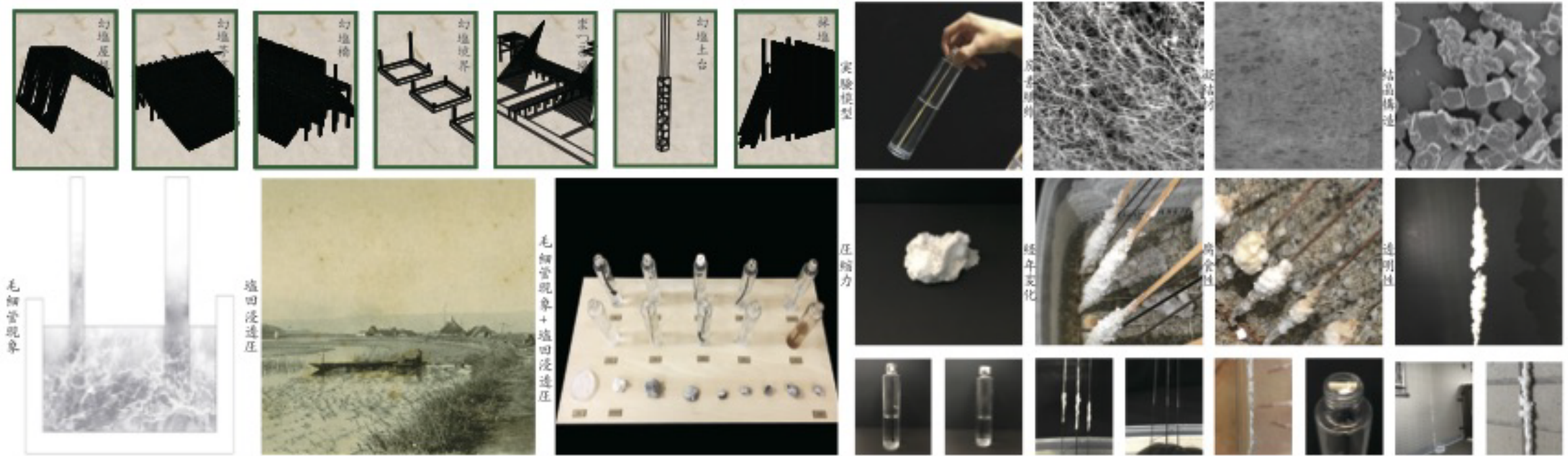
この一人二五首という設計手法は言葉を紹介して、痕跡を未来へ繋ぐものであり、新たな塩作りの発展を促す、試論であり討論である。



和歌建築＝言葉の意味＋原風景の痕跡＋修補技法による各々の詩人の思想

和歌建築＝語り手の行き来風景＋自己構図

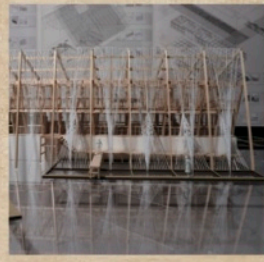
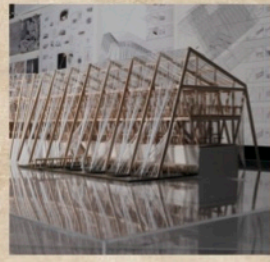
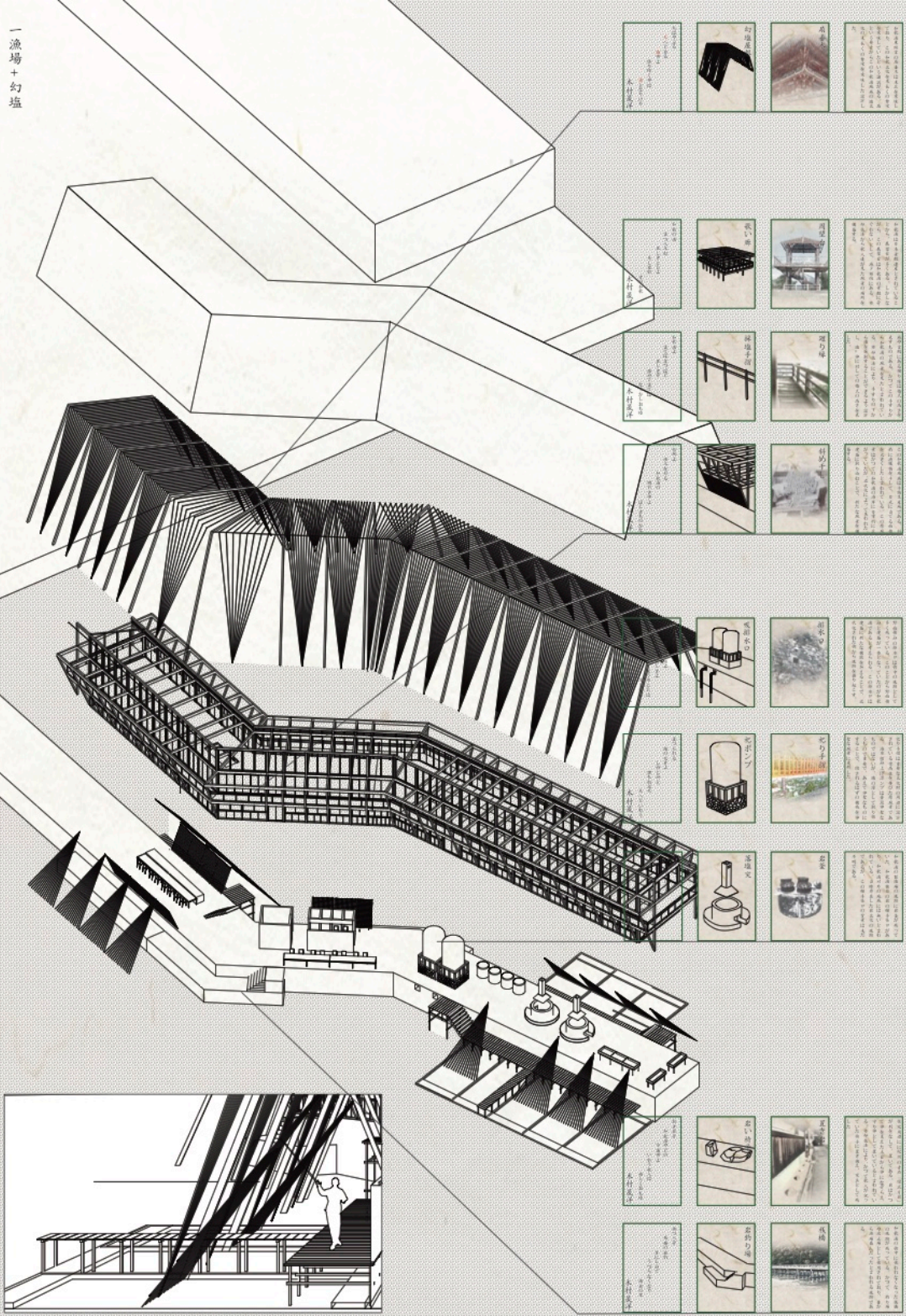
一人二十五首



幻塩実験

毛細管現象

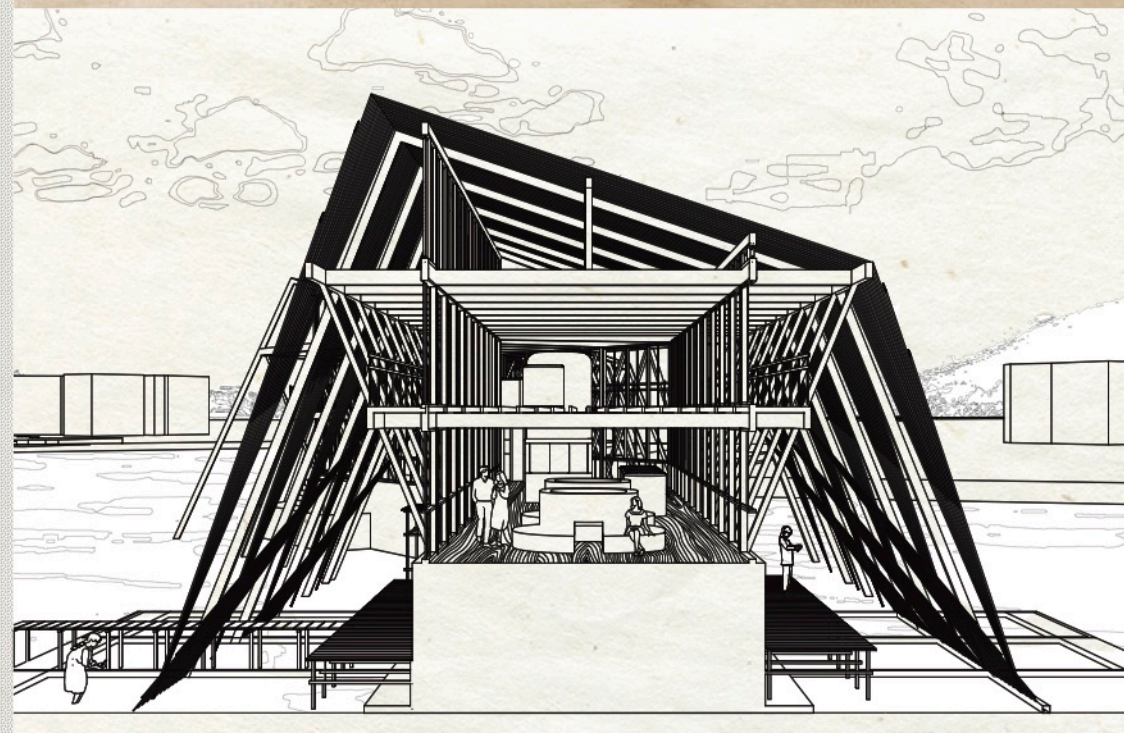




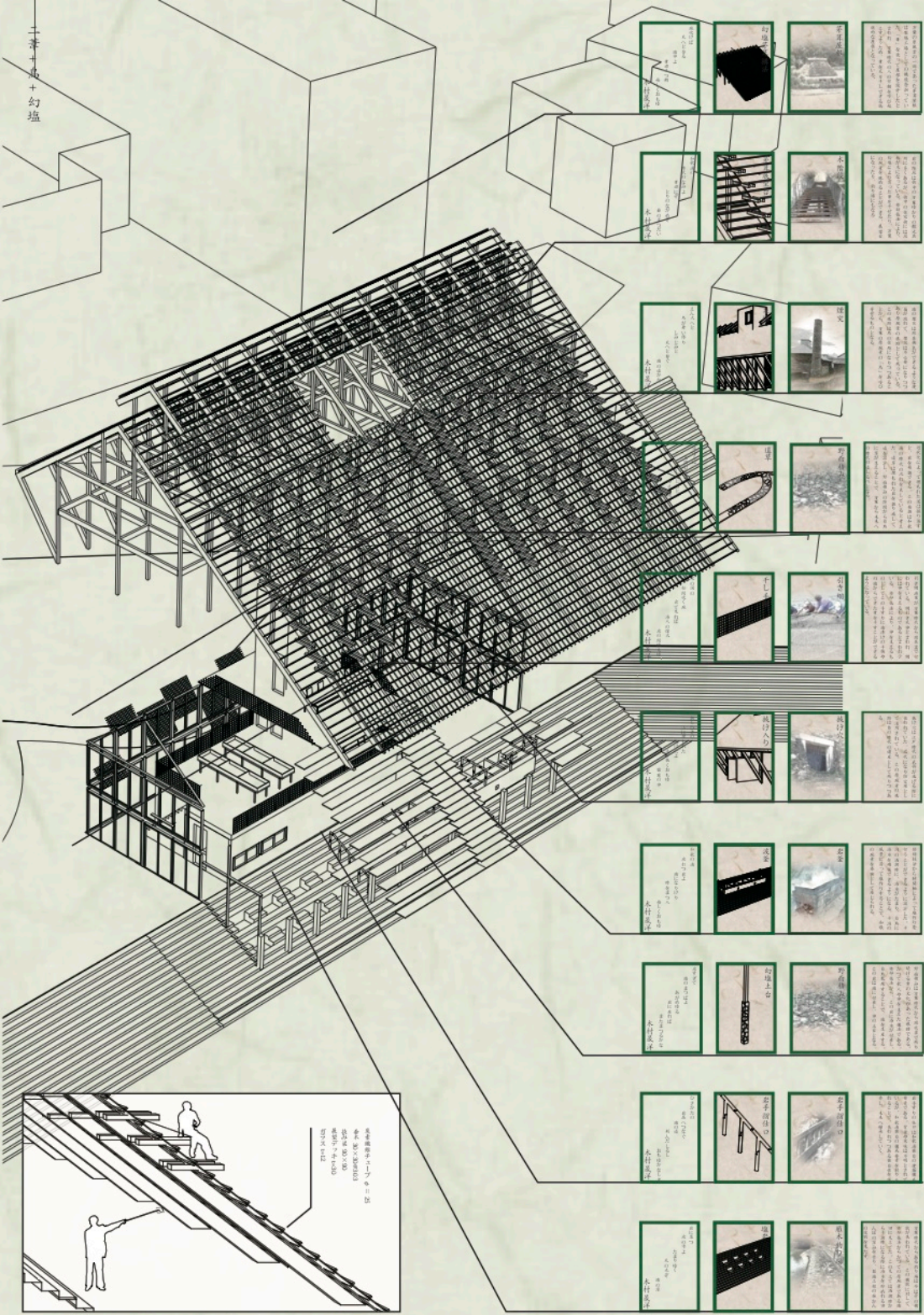
製幻塩一日

製幻塩一五日後

製幻塩一月後







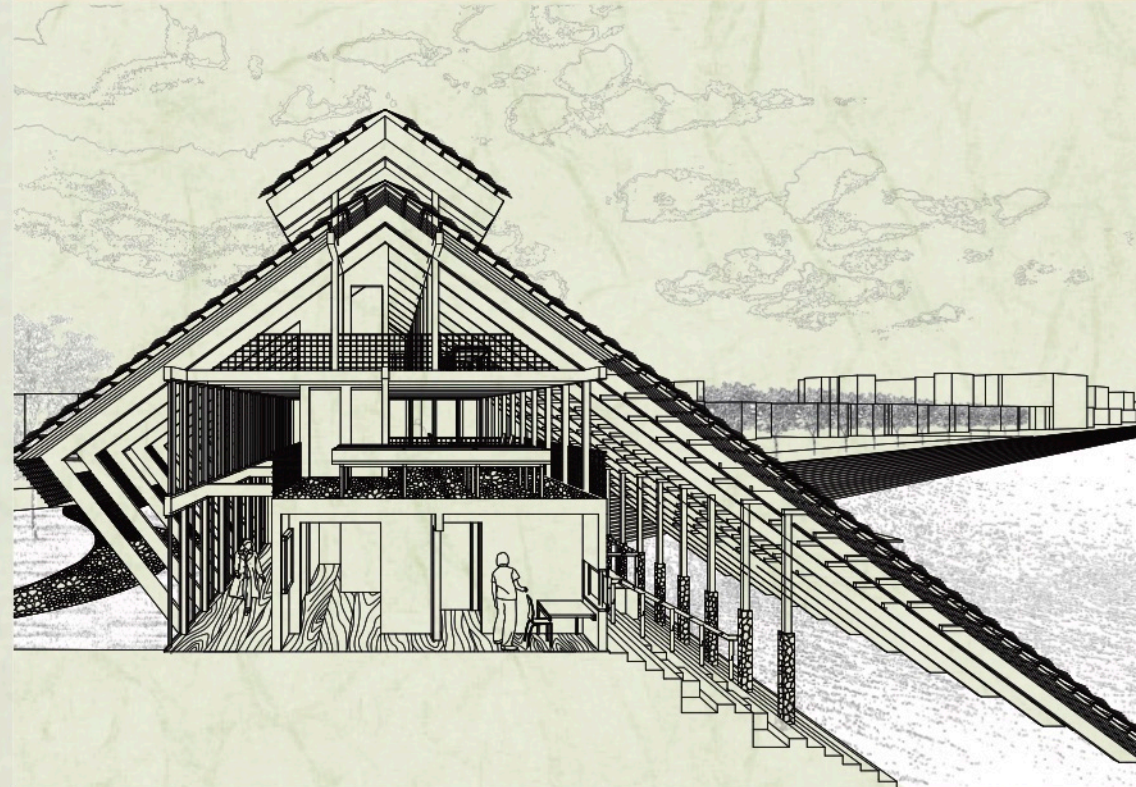
満湖時 貯水



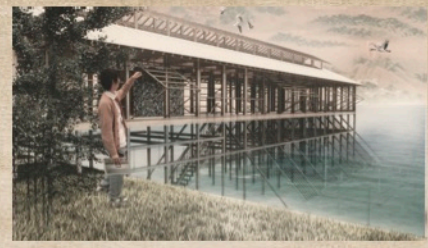
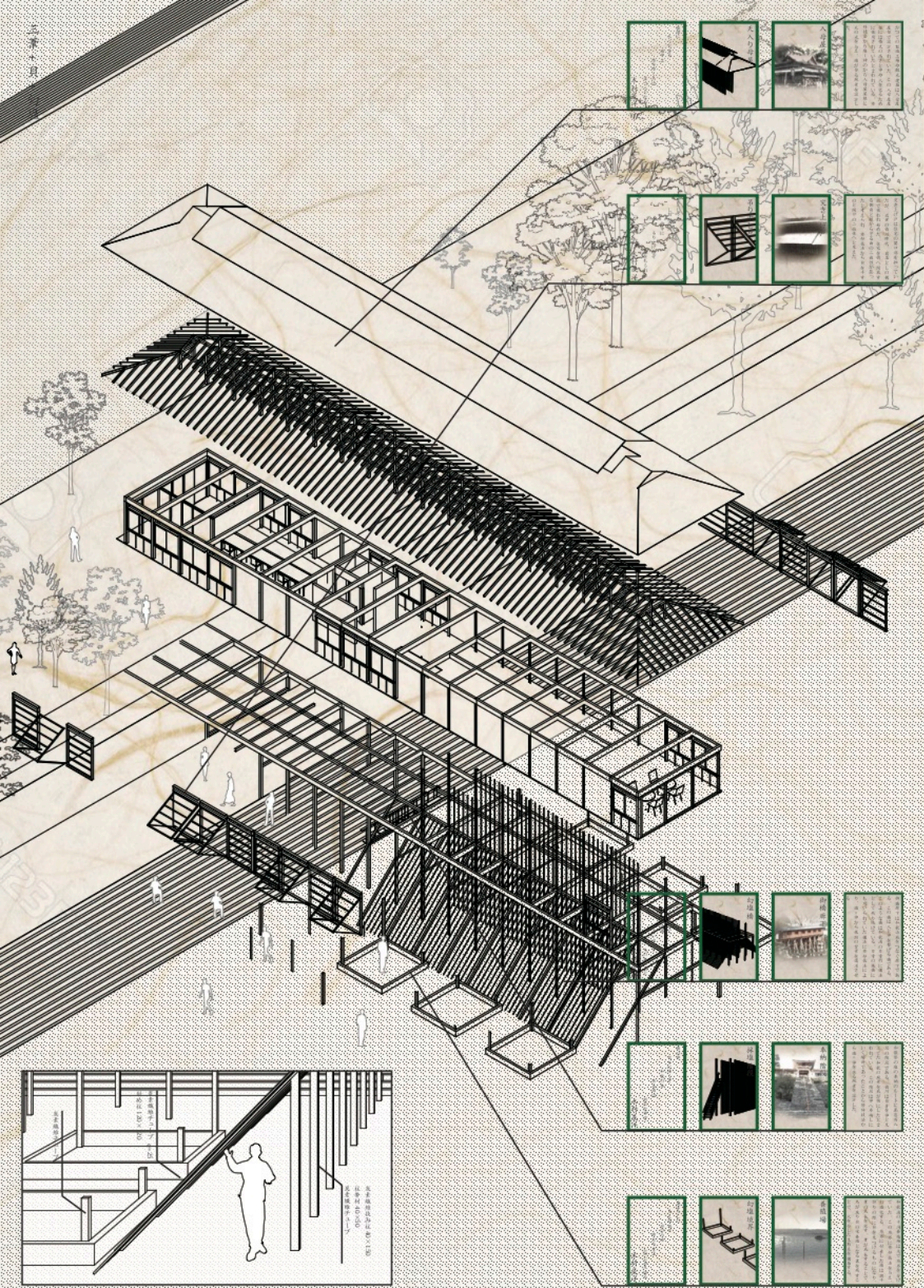
満湖時 釜製塩



満湖時 天日製塩



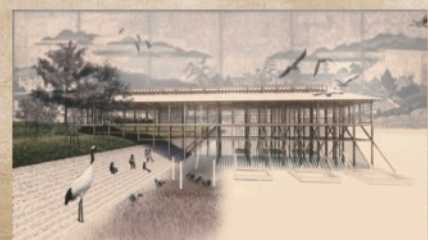




滿湖時 製幻燈



千湖時 湖千狩



千湖時 收穫

